

これは如来林菩薩が仏の神力(インスピレーション)を受けて、現象界の事物、個体は悉く心の所造であるということを悟り、讃偈を唱えたものである。ここで言う心はアリストテレスの言う基体と同じものであろう。これがあって形相、現象界が生じるのである。心の完成体として、潜勢から現勢に転じるのである。それが運動である。が現勢は潜勢の後に現れるのではなく、其完成せる本質、即ち心が運動において自己の姿(心を本、現象界を迹、影、末としている)を現わすとしているので、よほど類似しており、共に彫刻家と画師の芸術製作に譬えているのも頷かれるものがあるし、アリストテレスの原因四つの区別と仏教の十二因縁とも考え合せて思考したいのであるが、ここでは側道に入り過ぎるので他の機会にゆずる。

アリストテレスの存在論は論理主義と個体主義との統一をその神学に求め、存在自体の学たる存在論としての形而上学は、第一原理としての神の学たる神学に窮極する。併しそれは既にアリストテレスの論理的存在論の立場を越えるものである。論理的思惟の述語は如何に普遍なるも常に限定されたる普遍に止まる。然るに斯かる限定せられたる普遍に由っては個体は規定せら

れない。個体は限定せられた対象的普遍でなく限定無き作用的普遍に由つてのみ規定せられる。アリストテレスの神は正に斯かる作用的普遍、即ち凡ての個体をして夫々の本質に於て固有の活動をなさしむる如き内包的全体に外ならない。(天之御中主神と結びの作用の二神、大和世界を顕現する神)併しそれが既に普遍の論理を越える超越的全体であつて、客観の思惟原理としての論理に盛り切れざる主観の自覚が始めてこれを捉え得るものなることも明である。彼の潜勢の概念は、現勢に於て矛盾的に統一せられるを媒介する為めに思惟せられたものであるが、それは却て作用的飛躍的のみ統一し得べき対立を、对象的に連続化する要求に随することを免れない。論理的存在論は此処に破綻を暴露し、一度其制限を自覚して主観の自覚を論理以上のものとして解放することにより、再び自覚を否定の否定的に論理に止揚する弁証法に至るのでなければならぬ所以が認められるであろう。アリストテレスの存在論的論理はヘーゲルの弁証法的論理に問題を残し、後者に至つて始めて解かれるに至つたというべき趣きがあるのも是に由るのである。

古事記

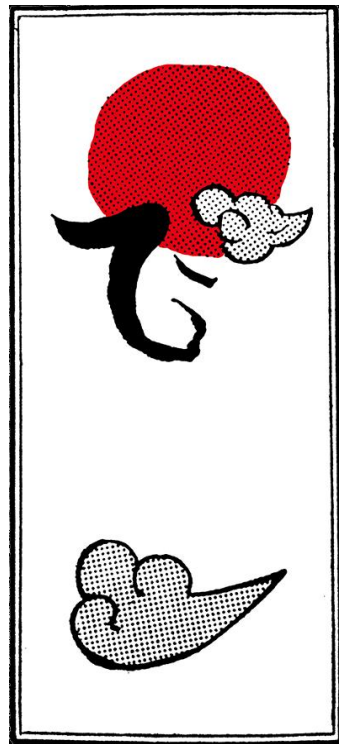
天地の初発のとき

— 実在 — (六)

反省的方法

— 存在論、アリストテレス(2)

竹葉 秀雄



第 55 号
 月 1 回 発 行
 ひの心を継ぐ会
 〒799-1336
 住所: 愛媛県西条市
 上市甲 720-1
 TEL: 080-2986-0856

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は 大和世界を建設します

農士道

第五章 農士論

第二節 帰農的安立

菅原 兵治

蚊と夔と蛇との問答

蚊(百足の虫。むかで)が夔(龍に似て一本足なるもの)に向っていった。

「君はそれでも歩けるのかい。」

夔は答えた。

「君はその百本の足を自慢するのかね。よく考えて見給え。君は百本の足で行く所を、僕は一本の足でぴよんぴよんと跳んで行く。それで君が格別僕よりも速いということもなければ、僕が君よりも遅いということもなく、一緒に歩いて、君の行く所には何処にでも僕も行き、未だ嘗つて後れたことがないではないか、だから君は足の数が多からといって、何も僕の足の寡いのを笑うわけにはいきまい。僕をして言わしむれば、君の九十九本の足は皆無用の長物ではないか。君がいつも其の百本の足をみんな用いてわざわざと歩くが、一体あれで煩わしくはないのかえ。」

すると側に蛇がいて、

「おい夔！君は其の一本の足を自慢して、蚊の百本の足を煩わしいというのか。この俺を見る。俺は足などというものは一本もなく、よるよる匍い歩くが、それで君と一緒に歩いて、君がおおければ俺もおおく歩くし、君が疾ければいくらでも、俺も疾く走るし、君の行く所なら何処にでも行き、未だ嘗つて後れたことが無いではないか。それに、水というなら水の中でも渉るし、木というなら木の上にも登るよ。俺はこの通り一本も足がなくとも、何の不足もなく、又出来ないということもないぞ。俺から観れば、君の一本の足も亦徒らなる無用の長物なるのみだ。」

造物の神が之を聴いて、

「善いかな、無用の用を知る。一体足に限ったことではないが、多少とか有無とかいふのは物の自然である。わしが万物を作ったとはいえ、自ずから然るんで、わしと知り知る所ではないのだ。だから、有るからといって、其の有るにまかせて楽しめば、天下ありったけのものを費い尽しても未だ足らぬことになり、之に反して、無いものは其の無い所を楽しめば、何処に行っても足らざるなしじゃ。其の与えられたも

のを以て満足するとせざるとは、わしもどうすることも出来ぬことだ。だから、無にして其の無を楽しむ能わざる者は、一寸した機(はずみ)で他の物を盗むようになるものでな。―太宰春台著「産語」による―

名や利という点より見れば、農業は決して蚊ではあり得ない。然し夔や蛇だから歩けぬということはない。金銭という「おあし」が少ないからといって、人間の生活全体より見て、必ずしも楽しみが無いというものではあるまい。私共は其処に修行と工夫を積んで、「無にして其の無を楽しむ」、更に百本の蚊よりも一足夔や無足蛇の歩行に却って自由のあることまでを悟りたいと思う。

馬耕について

三浦 夏南

現在自給自足研究の一つとして馬耕についても調査を行っている。トラクター、管理機などのガソリン機械の普及により、牛馬耕は恐るべき速度で零落してしまつた。資材、エネルギーの依存、自然環境への配慮等の観点からも、機械一辺倒の農業から徐々に離脱して行かなければならないが、そういった物理的理由だけではなく、「耕す」という営みには文化的、精神的価値が存在するので、そちらの側面も忘却してはならない。

例えば、トラクターは便利ではあるが、便利であるが故に家族との協働という大切な時間を奪ってしまう。農業の中で耕すということの重要性は極めて高く、時間的にも価値的にも農業の大きな割合を占めているが、その耕すということをトラクターで片づけてしまうと、これだけで農業の大部分が家族の手から機械と個人という近代の中に取り込まれてしまう。これは表面上便利に見えて大きな損失ではないか。現在も基本的にはトラクターと管理機で畑づくりを行っているが、畝の溝切の仕上げなどは管理機では完全に仕上がらない部分も多く、鋤での作業となる。この鋤での作業がやはり、農業をしているなという充実感を最も感じることでできる時間である。畑づくりの全体から見れば些細な作業ではあるが、自分の実感としては、畑づくりの総仕上げであり、畑づくりの中で大きな部分を占めていると感じている。家族が声を掛け合いながらゆっくりと作業をしていると、機械の音もなく、風の音や虫の声が聞こえて清々しい思いがする。これが農業の全体であれば、農家はもっと幸福になれるのではないかという気がする。やはり機械は便利に見えて農家から農を行うものの幸福を奪っている。

これが馬耕になれば、さらに動物という存在が家族の中に加わってくるので、さらに人間の思い通りには行かないだろう。それこそ馬の顔色を見ながらの仕事になる。馬が疲れば、草を食わせて休憩させなければならぬし、まっすぐにばかり歩いてくれるとも限らない。そこに却って楽しみがあるのが農業である。機械を使えばすべてが計算できるので、効率化できるが、農において計算できるということは却って農家の苦痛になる。計算が出来るということは、その数字に向けて仕事を片付けて行かなければならなくなる。思わぬ機械トラブルが大きなストレスに

なってしまう。人智で予想しきれない家畜の力を借りなければならぬことは、現代の人の効率の観点から見れば「荷物」に見えるかもしれないが、農家の視点から見れば、馬がもたらしてくれるのは安心であり、幸福である。

人ではない動物に言葉は通じないが心を通じることが出来る。全てが論理化され、数値化されたこの世界で、心を以て心を伝えなければ仕事が出来ないことは、大きな幸福である。家族が馬や畑を通じて天地自然の中に溶け込んでいく、現代人からは神秘的とも見える営みを、かつての農家は当たり前のように十年を一日の如く繰り返していた。この当たり前前の世界に、我々は回帰する必要がある。

小野鶴山の『大学師説』②

庄宏樹

朱子学における悪の問題を考えるにあたって参考になるのは、朱子の「明道論性説」という文章である。この文章は、『二程全書』巻之一に収められた程明道の言葉に朱子がつけたもので、これを見れば「本然の性」と「氣質の性」との違いについて明確に理解することができる。

さて、朱子学は「性善説」であると普通言われる。確かに、明道も「善は固より性なり」と言っているのだが、彼は同時に「然れども悪も亦た性と謂はざるべからず」とも述べていて、本当に朱子学が性善説なのであれば、この明道の言葉をどう理解すべきか、という問題が生じる。

この言葉に対する朱子の注釈を見ると、

天下の善悪は、皆な天理なり。これを悪と謂ふは、本と悪に非ず。但だ或いは過ぎ、或いは及ばずして、便ち此くの如し。

天下善悪、皆天理。謂之惡者、非本惡。但或過、或不及、便如此。

という、これもまた程明道の言葉が引かれている。つまり、悪は本来悪なのではなく、ただ「過不及」にすぎない、というのである。

この説明は、西洋的価値観が主流となった現代に生きる我々にとっても、大いに得心のいくことであろうと思う。例えば、トルストイには次のような言葉がある。

自分の悪しき行為を弁解するために、最もよく持ちだされる間違った口実は

—— 家族の幸福のため、という口実である。吝嗇、収賄、労働者の弾圧、不正な商売—— これらはみんな家族に対する愛情の名において弁解されるのである。

(北御門二郎訳『文読む月日(中)』ちくま文庫、一五八頁)

言うまでもなく、家族に対する愛情は善なるものである。だが、それが「過ぎ」れ

ば、やがては不正という悪に手を染めることになりかねない。古歌に「人の親の心は間にあらねども、子を思ふ道にまどひぬる哉」というものがあるが、これもそのことを歌ったものではないかと思われる。学問とは、結局はこの「過不及」を無くしていくことに他ならない。

明道は、人の善悪を水の清濁に喩える。水は澄んでいるのが本来の姿であるが、現実の水は皆多かれ少なかれ濁っているものである。これと同じように、現実の人間には善もあれば悪もあるが、本来的には善である。この善一元の人間性を朱子学では「本然の性」と呼び、善もあれば悪もあるところの人間性を「氣質の性」と呼ぶ。だが、繰り返しになるが、「悪がある」と言っても、それは本来的に悪なのではなく、氣質人欲による過不及がそのように見せているにすぎない。

小野鶴山の『大学師説』に話を戻すならば、鶴山は学問の意義について次のように述べている。

「一度あまきを食へば甘ふ覚へ、苦きを食へば苦覚へる。口がわづらへば、さふ覚へぬやふなもの。煩へば療治せねばならぬ。其療治の名を学と云。其本然を煩らはす病氣の名を氣質と云ひ、人欲と云。氣質は自然に生れつきのわるいを云。人欲は生れたからだの生きたなりに、どうありたい、かくありたいと出るを云。此氣質人欲がすぐに本然についてをる病で、よく切れる刀にはさびると云ことを身なりに持た様なもの。さびればとぐことがなければならぬゆへ、山に砥石がある。人の病もそれで、氣質人欲があればそれを直す為のいぎいはれぬ法が天からぶらさがりてある。それを学と云」

人は体を持って生まれてくる以上、人欲が無いわけにはいかないが、しかし刀を放置しておくで錆だらけになってしまうのと同様、人は学問をしなければ知らず知らずのうちに悪へと流れていってしまう。そうならないようにするための薬の役割を果たすのが、この『大学』という書なのである。

とよくも農園だより

三浦 美恵

元旦に今年の抱負を決めた事を、ついこの前のように思い出します。月日が経つのは早いもので、気が付けば十月も終わろうとしています。

今月も、先月に引き続き農作業の合間に自給自足調査として、各方面に詳しい方を訪問しました。



稲木や鶏小屋に使う材木を求めて久万高原町のイベントに参加したり、南予で養鶏をしている主人の幼馴染と再会したり、馬耕調査のためにオリエント馬事センターという静岡の乗馬クラブを訪れたりしました。鶏小屋に使う材木は、良いものがまだ見つかっておらず、引き続き調査中です。鶏小屋を建てるイメージは湧いてきたので、お米の収穫が終わった十一月に建設したいと考えています。乗馬クラブでは、馬耕に適した馬を見つけてくれる人と出会えたので、まずは一歩前進できました。

農作業としては、ネギの畑準備とネギ定植、アスパラガス収穫、たかきびの収穫とお米収穫、秋野菜の収穫と手入れを行いました。

ネギに限ったことでは有りませんが、野菜は冬になると生長が止まります。そうなる前にネギを育て、冬に出荷できるネギを確保すべく、今までで一番多くネギを定植しました。朝の家事を済ませると、私と義妹は、それぞれ一歳と〇歳の子供をおんぶし、夫婦ペアの四人で植えていきました。上の子供達は畑を走り回り、泥だんごなどを作って楽しそうに遊んでいました。五日間で合計三反にネギが植わった

姿は圧巻です。今後は生長具合を見て、必要であればトンネルをかけながら生育をずらし、冬いっぱい定期的にネギの出荷ができるよう管理していく予定です。

アスパラガスは、秋の訪れとともに収量も減ってきており、出る芽も細くなってきました。農協の出荷受け入れ日も、毎日から週三日に代わり、今年の出荷終了も間近です。それでも周囲のアスパラガス農家と比較すると、出荷量が多いようで、私達の住む周桑地域内では、反当りの出荷量が上位になりそうです。これも、無農薬・有機栽培を目指して土づくりを研究していた成果だと思っています。

たかきびは、名前の通り私達の身長を優に超えて高く育ち、三メートル以上になりました。一株ずつ、ハサミで収穫していき、束ねていきました。庭に吊るして乾燥させ、雑穀ご飯として頂きました。プチとした食感が印象的で、自分で育てたものをこのように頂くのは感慨深かったです。

お米は十月末に、五反全てを無事刈り終えることができました。先月は「ツキアカリ」という早生品種を収穫しましたが、今月は「ヒノヒカリ」という中生種を収穫しました。ほぼ全てのお米はコンバインで刈り取り、乾燥機で乾かして袋詰めを行いました。多くの人から「美味しい。味が違う。」と聞いていた稲木干しは、稲木に適した木が見当たらずに諦めていた所、知り合いの方で譲ってくださいる方を紹介して頂き、急遽実現することができました。二畝という小さい面積ですが、家族



全員で稲刈りをして、束ね、稲木を組み立てて架けていきました。コンバインでの収穫はあつという間で、機械作業なので男手のみの作業ですが、鎌で一つつ手刈りして束ねていく作業は女子供もできます。生産性は低いですが、幸福度の高い、良い一日となりました。乾燥が終わったら、ぜひ食べ比べをしたいと思っています。

秋野菜は、レタス、大根、カブ、小松菜、ホウレンソウ、チンゲン菜、のらぼう菜、油菜、高菜、その他葉物が獲れ始めました。今回は初めての固定種・在来種であり、加えてこれから自分達が全ての自給自足をしていく畑で作付けした最初の野菜という事もあり、家庭菜園初心者のように、一つ一つの野菜が育つだけで生活したいので、あまりスーパーで季節外の野菜は買わないようにしています。その分、時には食卓が寂しいこともありませんが、初めての野菜が獲れた時は家族みんなでワクワクしながらその野菜を頂きます。農を本として生活し、自分達のお米や野菜を育てるようになり、自然と食べ物大切に、無駄のないようにと考えるようになりました。これも天地自然と繋がっているという感覚が湧いてきているからだと思えます。手入れとしては、補植や二回目播種をしたり、マメ科の野菜に支柱を立てたりしました。また、張っていた防虫ネットをはがし、畝間を管理機で中耕、手での草引きをしました。農薬や機械を使って慣行栽培することに慣れていた分、自給自足畑での作業は途方もなく時間がかかるように感じます。けれどそのお陰で子供達と安心して農作業をす



ることができ、野菜の生長をゆつくりと楽しむことができます。畑とともに自分自身も成長し、将来的には私達の食べる全てのを自給できるよう頑張りたいと思います。

★今後の予定

○勉強会：十一月十九日(土) 十八時～

ひの心を継ぐ会事務局(西条市上市甲七二〇一)

※参加される方は事前に(080-2986-0856)までご連絡ください。

○講演会：十一月二十七日(日) 十四時～十七時

久保豊 一番町ホール(松山市一番町二丁目四一八三階)

○醒庵忌：十二月十一日(日) 十七時～十九時

ホテルマイステイズ松山 ヴェント(松山市大手町一丁目 一〇一〇)

★一燈照偶 万燈照園

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願ひ申し上げます。

★年会費

- 一般会員 三千元
- 賛助会員 一万元
- 特別賛助会員 三万円
- 支援会員 一万円

★振込口座

愛媛銀行 普通預金 本町支店
 口座番号 六一四二七三三五
 『ひの心を継ぐ会』